

## 母子同室制導入による母乳分泌への効果

西村 美香 高橋 紀子 仁木 雅子 際谷 明巳

小松島赤十字病院 2号棟3階

## 要旨

当新生児室では平成10年10月の2号棟3階への移転に伴い、母子同室制を導入した。授乳方法も、それまでの定時授乳法（3時間毎に直接母乳を与え、規定量に満たない場合は不足分を人工ミルクで補う）を改め、自律授乳法（児が欲しがる時に欲しがるだけ、主に直接母乳で飲ませる）を基本として行われるようになった。

そこで今回、母子同室制が授乳に関してどのような影響をもたらしたか、導入前後の事例で比較検討し、今後の授乳体制のあり方を方向付けたいと考え、調査を行った。

その結果、導入前に比べ導入後の方が、入院中においても1ヵ月健診の時点でも母乳率がアップしており、母子同室制が、入院中の母乳分泌や退院後の母乳育児の継続に対し効果的であることが確認された。また、児の体重減少についてもスタッフ間で意識を改める良い機会となった。

キーワード：母子同室、母乳分泌、体重減少

## はじめに

新生児集中管理方式—すなわち、戦後の施設分娩で当たり前に行われてきた出生直後からの母子分離や、個々の児の哺乳ペースを無視した定時授乳法に疑問や批判の声が上がるようになって久しい。

当新生児室は、平成10年10月に2号棟3階分娩室隣へ移転し、翌11月より念願の母子同室制を導入した。8ヶ月過ぎた現在では、母親や児に安静の必要や合併症の発症など特別な事情の無い限り、出産翌日より退院まで、1日平均12時間の母子同室が定着しつつある。授乳方法も、3時間毎に直接母乳を与え、規定量に満たない場合は不足分をミルクで補う定時授乳法から、母子同室中は、児が欲しがる時に欲しがるだけ直接母乳を与える自律授乳法に変更した。

しかし反面、児によって授乳時間がまちまちであるため、時間帯によっては、スタッフがそばについて授乳状況を観察、指導することが困難であることや、母乳分泌が充分でない時期の、児の摂取水分量不足への懸念など、スタッフ間でも不安がみられた。そこで今回、母子同室制が授乳に関してどのような影響をもたらしたか、導入前後の事例で比較検討し、今後の授乳体制の在り方を方向付けたいと考え、調査を行った。

## 研究方法

- (1)調査期間：平成11年2月～平成11年6月
- (2)対象：a 母子同室制導入前30例（平成10年8月～10月出生）  
b 母子同室5日以上（1日平均12時間）実施30例（平成11年2月～5月出生）  
a、b共カイザー、ハイリスク児は除く。共に初産18名、経産12名。  
※以下、aを異室群、bを同室群と呼ぶ
- (3)方法：異室群と同室群で以下の項目について比較する
  - ①日齢6日目朝7時の直接母乳量→規定量に対する％で表示
  - ②日齢6日目の体重の増減→出生体重に対する％で表示
  - ③1ヶ月健診時の授乳状況

## 結果及び考察

- ①母乳分泌について（図1参照）  
現在も朝7時の授乳だけは異室、同室にかかわらず

ず授乳室で直接母乳を与える前後に児の体重測定を行い、哺乳量を記録している。そのため、日齢6日目の哺乳規定量50～60ccのうち、直接母乳でどのくらい飲めたかを母乳達成度(%)として図に表した。

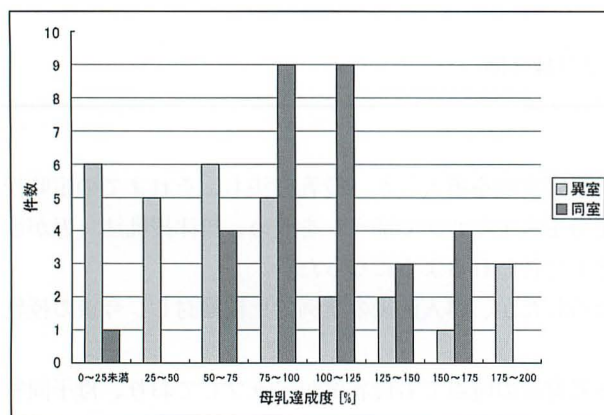


図1 日齢6日目朝7時の直接母乳量

これによると、異室群と同室群では規定量の母乳達成度に明らかな差が見られた。達成度が100%を超えた、つまり規定量が母乳のみで達成できたのは、異室群で30名中8名であるのに対し、同室群では17名と過半数を占めていた。逆に、母乳達成度が50%以下、つまり母乳量が規定量の半分に満たなかったのは、異室群の11名に対し、同室群ではわずかに1名であった。平均母乳達成率は異室群で75.6%、同室群で103.8%であった。また、異室群では母乳分泌量の多い人は180～190%と規定量の倍近くも児に飲ませているが、分泌の少ない人はほとんどをミルクで飲ませており、個人差がはっきり出ている。一方、同室群では、100%を中心にグラフが山のような形をあらわしており、母乳分泌量に極端な差は見られない。これは児と同室で長時間共に過ごすことにより、児の泣く声に反応して乳房が緊満したり、頻回に吸わせることにより乳管が早期に開通するといった、母乳分泌の好条件がどの母親にも整ってきたためと考えられる。

## ②体重の増減について (図2参照)

日齢6日目の児の体重の、出生体重に対する増減の比率をグラフに表した。

出生体重の平均は異室群で3178g、同室群で3184gと有意差はない。

これを見ると、母乳分泌のグラフとは対照的に、異室群が0～2.5%増を中心に山のようにまとまっ

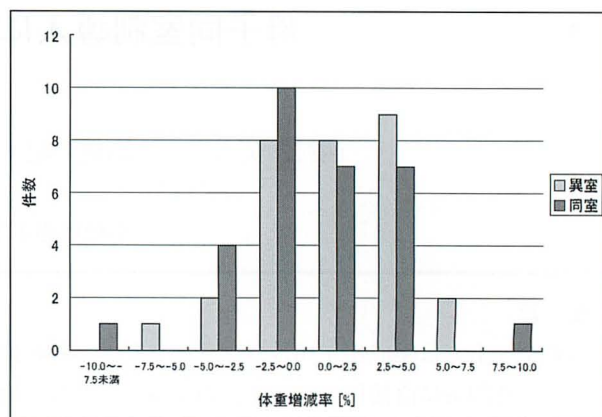


図2 日齢6日目の体重の増減

ており、同室群の方にばらつきが見られた。異室群の場合、母乳が出なくてもミルクを足して規定量をきっちり摂取するためにどの児の1日摂取量もほぼ同一となり、したがって体重の増減率も似通ったものとなる。しかし、同室群の場合は、母親の判断で児が激しく欲求している時のみしかミルクで補わないため、母乳分泌が充分でない時期、摂取栄養量不足による体重の増加不良をスタッフ間でも心配したところではあった。しかし、6日目の平均増減率は異室群の1.11%増に対し、同室群でも0.41%増であり、体重の増え方にわずかな遅れは見られたものの、医学的に体重増加は順調と充分呼べる範囲であった。なお、同室群の中に1例9%減(3048gから2768gまで、280gの減少)つまり生理的体重減少からほとんど回復せずに退院したものがあった。しかし、1ヶ月健診時のこの児の体重は3870gとなっており、標準700g～1kgといわれる生後1ヶ月の体重推移曲線を軽くクリアしていた。

この体重増減の調査を実施する中で、むしろこれまで体重の増減についてスタッフが気にしすぎていたのではと考え直すようになった。第8回母乳育児シンポジウム(99年7月31日～8月1日、神戸市にて開催)においても、ワークショップの中心課題として「新生児の体重減少～-10%の神話をどう捉えるか～」が取り上げられている。ユニセフ、WHOの「母乳育児を成功させるための10ヶ条」にも“医学的な必要がないのに母乳以外のものを与えないこと”と明記されているが、この“医学的な必要”の基準がこれまでは脱水イコール-10%の体重減少とされていたのである。しかし、浜北市の産科医、石井氏の報告によると、年間1,800例の出産のうち、

完全母乳育児が98%を占める石井第一産科婦人科では、1週間で出生体重に戻るのが約1割である。また、体重減少が10%を超える児が27%もいるが、1ヵ月で追いつくという。脱水で治療が必要か否かは小児科の先生方の総合的な判断に委ねるところではあるが、私達看護サイドも体重のみではなく、児の活気や全身状態についても観察能力を深める必要がある。そして、安易にミルクを足す前に乳房ケアや授乳時の環境改善に努め、また、母親の精神状態にも目を向けていくことが更なる母乳率のアップにつながると思われる。

③ 1ヶ月健診時の授乳状況について（図3参照）

従来より、1ヶ月健診時の予診表として母親に記入してもらっているアンケートから調査した。

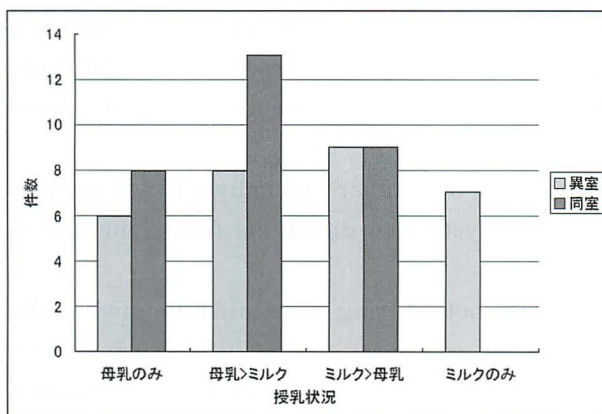


図3 1ヵ月健診時の授乳状況

母乳栄養のみか、人工栄養のみか、混合栄養ならどちらが主であるかの4つに分類した大まかな調査ではあるが、この結果からも明らかに異室群より同室群の方が母乳率が高いことがわかる。特にこの時点でミルクのみになっている例が異室群では7例見られたのに対し、同室群では0例であったことは注目に値する。このことは、母子同室により母乳分泌そのものが増えているということは勿論であるが、出産翌日から児と生活を共にすることにより、母親の児への愛着形成や母乳育児への意欲向上が図れたことが大きく影響していると思われる。入院中の母乳育児の確立が卒乳期までの母乳育児継続への第一歩であることを再認識できた。

一方、退院後の母子をサポートするための課題はまだまだ山積みともいえる。時代の流れで家族形態も変化し、昔からの母乳育児の知恵は若い母親たち

にあまり伝わらなくなってきた。母乳で育てたいという願望を持ちながら、独りで悩む新米ママも多い。当新生児室でもそのような状況への対策の一環として、3年前より主に初産やハイリスク児の母親を対象に退院後1週間以内に電話訪問を行っている。育児全般についての相談を受けるが、やはり授乳に関して悩む母親が多く、なかには勉強熱心でマニュアル本を沢山読んでいるが、実際にはその通りにいかないために、ジレンマに陥るといふ声も少なくない。このような場合、電話による指導では限界があり、また、それから1ヵ月検診までは空白の期間となる。この大切な時期に自宅を訪問し、母子の生活空間の中で実際に手を取って指導することが出来るようなシステム作りを考えていくことも重要と思われる。

西洋では、地域の母親同士で励まし合うサポートグループ活動が広がっており、国際的な組織を持つラ・レーチェ・リーグや、各国それぞれの状況に応じた草の根的なグループがある。日本でも1983年、4人の母親の呼びかけで発足した京都の母乳育児サークルがあり、集会の他に機関紙「おっぱいだより」を発行しているが、このような地域ぐるみで母子を支える活動組織ともつながりを持っていくことも、地域に根ざした病院の産科病棟として担うべき役割であろう。

おわりに

今回の研究で、母子同室制が入院中の母乳分泌や退院後の母乳育児の継続に対し効果的であることが確認された。また、定時授乳法から自律授乳法への移行でスタッフ間に見られた不安も少しずつ解消され、母乳育児推進への意欲や自信につながったと思う。

「赤ちゃんは3日分のお弁当と水筒を持って生まれてくる」<sup>1)</sup>とは、母乳育児の権威、故山内逸郎先生の言葉である。すぐに出ないからとあわてることはない。あきらめることもない。それよりも、新生児の「生命維持」にとって、また「母性愛の誘発」にとって基本的な重要性を持つ新生児の「母乳権」を医療スタッフや母親が奪ってしまうことのないよう、今後、終日母子同室制や完全自律授乳法の定着に向けて、さらに積極的に取り組んでいきたい。

文 献

- 1) 山内逸郎他：母乳育児シンポジウム・記録集'97  
日本母乳の会，1997
- 2) 橋本武夫他：母乳を科学する，新生児医療と看護

専門誌「ネオネイタルケア」収録 1997

- 3) 板橋家頭夫：新生児・未熟児 栄養管理マニュアル. メディカ出版，1996
- 4) 橋本武夫：新生児と母乳. メディカ出版，1992
- 5) 根津八紘：産褥乳房管理学第三版. 諏訪メディカルサービス，1987

---

## Effect of Introducing the Room Sharing System by Mother and Baby on Secretion of Mother's Milk

Mika NISHIMURA, Noriko TAKAHASHI, Masako NIKI, Akemi KIWATANI

3rd Floor, Building No. 2

Our new-born baby room introduced the room sharing system by mother and baby in October, 1998, when it moved to the third floor of Building No. 2. The nursing method was also improved from the fixed time lactation (direct nursing at 3-hour intervals supplementing the shortage with an artificial milk if the amount did not reach the prescribed value) employed until then to autonomous lactation (mainly direct nursing of mother's milk when and as much as a baby wanted).

In the present study, we examined how the system of room sharing by mother and baby affected nursing by comparing the cases before and after the introduction of the system to direct the future method of nursing.

The results revealed an increased rate of nursing mother's milk both during hospitalization and at the time of 1-month health examination after introduction of the system compared to that before introduction and effect of the room sharing system by mother and baby on secretion of mother's milk during hospitalization and on continuation of nursing with mother's milk after discharge from the hospital was demonstrated. The study also offered a good opportunity to change the awareness of body weight loss of a baby among the hospital staff.

Key words : Room sharing by mother and baby, secretion of mother's milk, body weight loss

Komatushima Red Cross Hospital Medical Journal 5:63-66,2000

---